

27. フィリピンの日本住血吸虫症の現状とその他の感染症について

医学部学生：四倉 玲，朝倉真希，飯田茉莉，落合祥子，鈴木綾乃，高田武蔵，松本佳之
フィリピン保健省東ミンドロ州住血吸虫症コントロールチーム：Rayrose L. Terrado
フィリピン保健省住血吸虫症研究訓練センター：Ignacio L. lipayon

国際環境衛生室：大平修二

熱帯病寄生虫病室：千種雄一，林 尚子

【目的】海外研修を通して、フィリピンにおける日本住血吸虫症の現状および主要感染症についての理解を深めるため、Oriental Mindoro 州と Leyte 州を訪れ実地調査した。

【方法】日本住血吸虫の中間宿主、ミヤイリガイ (*Oncomelania hupensis quadrasi*) の棲息地である Oriental Mindoro 州 San Narciso 村と Leyte 州 Dagami 町で、小学校近接の水田やその用水路、民家の敷地内において、それぞれ 15~30 分ほど貝を探索、採取し感染率を調べた。また、州保健局はじめ村保健部、村落などを訪れ主要感染症の現状について調査した。

【結果】住民の生活圏内で採取したミヤイリガイは San Narciso 村で 50 個中 1 個、Dagami 町では 102 個中 4 個が感染貝であった。一方、結核・マラリア・フィラリア症・狂犬病・デング熱がフィリピンでは主要な感染症であり、住民啓蒙や診療所の開設など、その対策が盛んに行われていた。また、フィラリア症患者の診療介助に携わり多くの知見と経験を得た。

【考察】フィリピンにおいて日本住血吸虫の感染源が住民の生活に密接に存在し、常に感染・再感染の危機にさらされていることが示唆された。また、プラジカンテルを用いた住民の集団駆虫・パンフレットなどの媒体を用いた啓蒙活動など撲滅に向けた活動を行っているが、下水処理の整ったトイレの使用や家畜や野鼠など保虫宿主の対策も必要である事を痛感した。一方、各町には結核に対して DOTS センター、狂犬病に対してアニマルバイトセンターが設置されており、それらがフィリピンではいかに身近な疾患で官民がその対策に力を入れていることが理解できた。また、フィラリア症患者の診療介助を通して、教科書では感じえない疾患の実体を経験し、予防医学の重要性を再認識した。

28. GBS の薬剤耐性に関する検討

越谷病院 産婦人科

飯塚 真，坂本秀一，市村建人，栗田 郁，林 雅綾，安藤昌守，濱田佳伸，榎本英夫，林 雅敏

【目的】GBS の新生児感染を防ぐため妊娠後期に GBS 検査を施行し、陽性者には分娩時に ABPC 等の抗生剤を投与し、新生児への感染を予防する事が奨励されている。

予防策をとることにより、新生児の GBS 感染症の頻度を減少できるが、完全には予防できない。その原因の一つに GBS の薬剤耐性が関与している可能性を考え、検討した。

【方法】09 年 7 月より GBS が検出された場合に薬剤耐性検査を追加しこれを検討した

【成績】現在までの 10 症例の GBS 陽性を検討した。薬剤感受性は PCG：10/10 (100%)，ABPC：10/10 (100%)，SBT/ABPC：10/10 (100%)，でありペニシリン系に対し薬剤耐性を獲得していなかった。CTX：10/10 (100%)，SZOP：10/10 (100%)，CFPM：10/10 (100%) とセフェム系に対しても耐性を獲得していなかった。一方、MINO：6/10 (60%)，EM：9/10 (90%)，CAM：8/10 (80%)，CLDM：9/10 (90%)，LVFX：8/10 (80%) 等には薬剤耐性が認められた。

【結論】GBS の薬剤耐性につき検討した。ペニシリン系に対しては薬剤耐性を認めなかった。産婦人科診療ガイドラインに示されているように新生児 GBS 感染予防の第一選択薬として ABPC は妥当であると考えられる。またセフェム系の抗生剤にも耐性を示さなかった事より第二選択としてガイドライン通りセフェム系薬剤を投与する事も薬剤耐性から考慮し、妥当であると考えられた。